〈原著論文〉

ホイットマンにおける「シンパシー」の概念

山　内　　彰*

The Concept of “Sympathy” in Walt Whitman

Akira Yamauchi

要約：19 世紀のアメリカを代表する詩人のウォルト・ホイットマンは、その初期において、「シンパシー」という概念を用いて、詩作を行った。この「シンパシー」という概念は 19 世紀アメリカの思想家によって積極的に議論されたものであるが、もともとはスコットランド啓蒙思想に由来するものである。その代表的な思想家の一人であるアダム・スミスの提唱する「シンパシー」と比較することによって、ホイットマンの「シンパシー」がどのようなものであったかを考察する。

Abstract: The concept of “sympathy” is essential to Walt Whitman’s poems. This concept was prevalent and much discussed by American thinkers in the 19th century. Whitman, a poet of that century, was also deeply influenced by this concept. The idea derives from the Scottish Enlightenment, especially from the exemplary thinker Adam Smith, who studied morals and economics. This thesis compares Adam Smith’s concept of “sympathy” with Whitman’s, and probes into the poet’s ideas.

Key words：ホイットマン Walt Whitman　アメリカ文学 American Literature　シンパシー sympathy　アダム・スミス Adam Smith

I

アメリカ 19 世紀を代表する詩人であり、新聞の編集者であり、また、ゴシック小説家でもあったウォルト・ホイットマン（Walt Whitman）は、民主主義や自由主義といったアメリカ的理念の熱烈な信奉者であった。その信念に決定的な影響を与えた一人に、彼の父がいる。彼の父はアメリカ的理念に身を捧げた思想家たちを好み、まだ子どもだったホイットマンに彼らの逸話を語って聞かせたという。実際、ホイットマン家の子どもたちの名前も、たとえばホイットマンの弟がジョージ・ワシントン・ホイットマン（George Washington Whitman）であり、また別の兄弟の名前がアンドリュー・ジャクソン・ホイットマン（Andrew Jackson Whitman）であったように、アメリカの英雄たちの名前をそのままもらい受けている。こうした親の影響は、直接子どもたちに及ぶというのが当時のよくある考え方であったようで、ホイットマンは後年、弟子となったバーク（Edmund Burke）に「これほどはっきりしている近代科学の結論は存在しないだろう－偉大な先祖のない偉大な人間など存在しないのだ」（Burke 687）と伝えている。また、ホイットマンが書いた禁酒小説『フランクリン・エバンズ』（*Franklin Evans*）では「各々の父と母が夜ごとに祈る美徳は、彼らの息子の性格に住みついているかもしれない」（Holloway 105）とも記されている。

もしホイットマンの主張する通り、親の影響が子どもに直接現れるのならば、ホイットマン自身も親の思考に強く影響されていることになるだろう。父親が夢中だったアメリカ革命期の思想に、ホイットマンもかなりの影響を受けたと考えてよいことになる。そして、その頃、アメリカで大きな力を有し、その後のアメリカの在り方にも強い影響を与えたのが、イギリスを発祥とするスコットランド啓蒙思想（Scottish Enlightenment）であった。1730 年代から急速に展開し始める、この思想は、経済と道徳という問題をその中心にすえながらも、それに関連するさまざまな課題を呈示し、また、その解決策を模索した思想的活動であった。経済が活性化し、それに伴う交易活動が活発となったのは社会にとって有益な部分

受付日　2020. 5. 17 ／ 掲載決定日　2020. 8. 5
*関西福祉科学大学　健康福祉学部　教授

もあったのだが、それは同時に、富の集中的分布、それによる貧困格差、さらには、こうした広がりに対する宗教的な批判ともあいまったかたちで、道徳への急速な関心を生み出していった。とりわけ、社会全体に悪影響を与えると考えられた「腐敗」の問題はこれらの思想家の興味をひき、いかにすれば、経済的な富を得ながら、社会的な腐敗、富の格差や贈賄といった反倫理的な行為を防ぐのかがその中心議題となっていったのである。この点について、田中正司は以下のようにまとめている。

1730 年代から顕在化しはじめたスコットランド「啓蒙」思想の課題は、一言でいえば、［中略］商業化の不可避性と経済発展のための封建制打破の必要を認めながら、フレッチャー以来のシヴィク思想家の提出した「富と徳性」の緊張（矛盾）の問題にどのようにしてより前向きの応答をするかという点にあったといえるだろう。［田中 2003 40、強調は田中］

経済の発展を止めることなく、しかも、その中で徳（virtue）のある市民を生み出さねばならないという課題が、スコットランド啓蒙思想の中心にある問題意識だったのである。この思想は、アメリカ建国時にのみならず、19 世紀のアメリカにおいてもふたたび大きな刺激を与えることとなった。後年、ホイットマンが「人格主義（Personalism）」という独特の思想を生み出すきっかけも、遡れば、こうした市場社会の中の徳性というスコットランド啓蒙思想まで辿ることが許されるだろう[1)]。

富に対する欲望を解き放った経済市場と、それを抑制するための市民の徳という二つの契機における均衡の在り方を探ったのが、スコットランド啓蒙思想だと言い換えることもできる。そして、この思想家の中でも、とりわけ著名であり、後世に大影響を与えたのが、周知のように、アダム・スミス（Adam Smith）である。彼の『道徳感情論』は、主著とされる『国富論』よりも先に刊行された最初の著書である。行き過ぎた市場を抑制するには、人々の徳性に賭けるほかなく、そのためには基本的な道徳の在り方が問われることから、『道徳感情論』をまず書いたわけである。その際に彼が主唱したのが「シンパシー（sympathy）」[2)]の理論であり、この「シンパシー」を基幹とした考察を施したのが『道徳感情論』という著書であった。

一方、19 世紀のアメリカにおいても、この「シンパシー」がきわめて重要な考えとして浮上し、ホイットマンも「シンパシー」を中心とする思想を展開している。本論文では、この二人の理論の共通点と差異を探りつつ、ホイットマンにおける「シンパシー」概念について考察を深めたい。

では、まず、アメリカ思想史に影響を与えた、アダム・スミスの「シンパシー」について、次節でみてみよう。

Ⅱ

アダム・スミスによると、「シンパシー」という概念は、主に二つの契機を有している。第一に、出来事を体験する者とそれを観察する者に分かれている点、そして、次にその体験において想像力が行使されるという点である。たとえば、ある人が苦痛を感じるとき、それを目撃した人間は、自分の感覚によって与えられる限界（個体の知覚能力の範囲）を超えて、その痛みを感じ取ることができる。つまり、苦痛を感じる者（sufferer）の苦痛を、それをみている観察者（spectator）が想像力（imagination）を使うことによって、自分の身体に生じたわけではない苦痛であっても、苦痛として感知するわけである。この点について、スミスは次のように記している。

私たちは、他人が感じていることを直接体験するわけにはいかない。したがって、同じような状況に置かれたら自分自身はどう感じるかと思い浮かべてみない限り、他人がどんなふうに感じているのかはわからない。仲間が拷問の責め苦に遭っているのに、こちらがのんきに暮らしていたら、どれほど苦しんでいるかを感じとることはできまい。私たちの感覚は自分の体から抜け出すことはできないし、それをした人もいないのである。仲間の感じ方をいくらかでも知ることができるとしたら、それは想像によるほかない。［アダム・スミス 58］

個体の感覚や身体という限界を超えて、他者の痛みを感じ取るには、想像力によるほかないというのが、スミスの基本的な考え方である。論理的に考えれば、他者の苦痛はその本人内に留まる感覚であって、別の個体がその感覚を自分の感覚器で捕えることは不可能である。私の痛みは私の内部で発生した神経伝達であって、同じ神経を共有しない他人が、私の苦痛をその通りに直接的に感知することはできないのである。

さて、このように、自己と他者を完全に分離した場合、自己の内部で発生した感覚は他者と一切共有されないという極端な結論が導き出されることになる。しかし、それでは、苦しみはある一人の人間の内部に留まり、社会的広がりを持たず、何の救済も社会的に与えられないことになってしまう。だが、この結論が社会的な経験や日々のわれわれが体験する感情からほど遠いもの

である点は、誰の目にも明らかであろう。

したがって、スミスはこの自己と他者のあいだにある、どうしようもない隔絶を想像力を使って繋げようと試みることになる。この部分をスミスは、拷問で苦しんでいる人を例に、次のように描いて見せる。

想像力の働きによって自分の身を仲間の状況に置き、自分自身がまったく同じ拷問に耐えていると考え、言うなればその体に乗り移って多少なりとも身代わりになったなら、当人がどう感じているかも少しはわかり、そう大きくはちがわないある種の感情すら、かすかながらも抱くにいたるだろう。［アダム・スミス 58］

すなわち、苦痛を感じる他者を、想像力によって、われわれ自身に起きたことと関連づけることで、比喩的にわたしたちは「その体に乗り移」るのである。むろん、ここで暗示されているのは、宗教的あるいは精神論的な二つの個我の融合などではない。むしろ、自己と他者が峻厳に区別されていることからこそ、こうした想像力を用いた転換[3]が求められている点にじゅうぶん留意しなければならない。しかし、この過程には、すでに後にホイットマンが主張するような、神秘的融合（自己と他者が神秘的に一体化すること）を思わせる部分がある点も否めないだろう。スミスが比喩で語っている文脈を、比喩でなく、そのまま受けとってしまえば、そこには相手と自分が入れ替わるという神秘的な体験が存在していることになる。

そして、スミスはこの想像力によって感知された、他者の苦痛を感じ取るという観察者（spectator）が内面化することによって、「公平な観察者（impartial spectator）」が成立すると考えている。この「公平な観察者」が、いってみれば、市民の徳性の基盤となり、他者の苦痛や不幸な状況を無関係で疎遠なものとしてではなく、わが事として引き受け、理解し、そのために何かを行うといった一連の動作につながるというわけである[4]。

この一連の過程は、もちろん道徳的・政治的な意味合いにおいて主張されていることであり、ホイットマンが後にそうしたような、精神的・宗教的な文脈でとらえられてはならないだろう。しかしながら、アダム・スミス自身も指摘するように、この一連の過程（他人の状況に想像力を用いて入り込んでいくさま）は、小説を読んで主人公に感情移入する体験と類似している。スミスはこの点について、次のように説明している。

たとえば悲劇や小説の主人公に惹きつけられると、その人物が救われたときには、彼らの苦難を嘆くのと同じく心の底から喜びを感じるのであって、彼らの不幸を思いやる気持ちの方が、幸福に対する気持ちより真剣だということはない。［アダム・スミス 60］

つまり、絶対的に隔てられた他者の感情がどのようなものであるかを想像し、その感情とほぼ同等のものを思い描くという様子は、主人公が味わう苦痛や冒険に一喜一憂する読者の地位とひじょうによく似ているといわねばならない。スミスの著書は、あくまで政治的・経済的背景に生まれたものであり、そこに神秘性や文学性を見出してはならないものである。しかしながら、スミスの描く「シンパシー」の過程が、スミス自身が指摘しているように、文学作品を読む読者の体験と類似していることも間違いない。ここに、19 世紀中葉のアメリカで「シンパシー」という概念がもう一度復活・席巻し、多くの作家や学者を巻き込んで論争となった理由があるのだろう。したがって、スミスの「シンパシー」には、もともと、それが文学に適用されうるような素地があったと考えてもいいだろう。

次節でホイットマンにおける「シンパシー」についてみてみるとこで、「シンパシー」という概念がどのように文学的な領域へと広がりをみせているのかをとらえてみよう。

Ⅲ

ホイットマンの代表的な詩のタイトルが「私自身の歌（“Song of Myself”）であることからも分かるように、「私」という自己をどのように捕えるのかが、詩人の中心的課題の一つである。いってみれば、ホイットマンは自己とは何なのかを詩を通じて追究しようとしたとも表現できるだろう。そして、後に心理学で一般的に使用されるようになった「アイデンティティ（identity）」という言葉を 19 世紀後半に使用し始めた最初の人物の一人でもある。このように、ホイットマンの関心は自己を中心に貫かれているが、これは当時のアメリカで個人主義や民主主義が成熟し始めたことが背景にあるのだろう。自分とは何者なのか、他者とはどう違うのか、そして、民主的な環境下でふつうの人間（common man）を導く、すぐれた個人とはどのような存在なのかといった疑問が、ホイットマンのみならず、当時の思想家たちのあいだでも大いに議論されていた。

ホイットマンにとって、自己とは二つの契機から成立する。個人はいわばこの二点を中心に立ち現れるわけで、この二つの契機を考察することは、ホイットマンの思想の中枢を考えることだといっても過言ではないだろう。二つの契機とは、一つは「プライド（“pride”）」で

あり、もう一つは「シンパシー（“sympathy”）」である。

この両者の関係について、ホイットマンは『草の葉（*Leaves of Grass*）』の「序（Preface）」で、次のように書いている。

魂には、自身以外の教訓を決して認めない、あの限りないプライド（that measureless pride）がある。しかし、魂にはプライドと同じくらい限りないシンパシー（sympathy）もあって、一方が他方の均衡をとっている（the one balances the other）。［*Leaves of Grass* 718］

この記述で明確に述べられているように、魂には「プライド」という側面と「シンパシー」という側面があり、それが互いにバランスをとっているというのが基本的な考え方なのである。したがって、魂から人間を考察した場合、ホイットマンにおいて、その両者が釣り合いよく均衡していることが望ましいということになる。

詩人は 19 世紀のアメリカ人らしく、個人主義を主唱し、そのためには「自立」が必須であると主張している。この場合の「自立（independence）」とは、もちろん個人の心理面での自立のことであるが、その背景には政治的・文化的な「独立（independence）」の意味が含まれている。それまでのアメリカは主にヨーロッパの後追いであり、ほとんどそのコピーにすぎなかった。それを新たな形で造形しなおし、いかにもアメリカ的な要素を普及させていくことこそ、当時の文化人の重要な役割だと考えられていた。19 世紀のヨーロッパが主として王制・貴族制であり、血縁や地縁を中心とした階級社会であったとすれば、新しいアメリカはそうしたものから無縁の国であり、政治的には民主制を擁し、社会は平等社会で、一般人（common man）中心の社会であり、血縁・地縁にとらわれることのない個々の人間の能力を基盤とする国家を目指すべきだというのが、当時のアメリカ知識人のおおよその合意事項であった。

こうした自立した個人を描こうとしたとき、ホイットマンの頭の中にあったのは、自立し、何者からも影響をうけない強い個人（プライド）という側面である。ホイットマンが「私自身の歌」で「私はよろこびとプライドの歌を歌う（“I chant the chant of dilation or prides”）」［*Leaves of Grass* 49］と記載したのも、こうしたプライドという個人の心理の重要性を確信していたからだろう。

1847 年から 1849 年頃に書かれたと推定されている彼のノートには、次のような記述が残されている。

本当に高貴で広がりのあるアメリカ人の性格というものは、貴族生活の「紳士」の性格や、ヨーロッパやアジアの社会政治体制のもとでの性格よりも、ずっと持続性があり、普遍性のあるかたちで育成される。それは、限りなくプライドがあり、自立的で、自分をしっかりと持っており、寛大で、優しいものなのだ（proud, independent, self-possessed, generous and gentle）。［Zweig 53］

ヨーロッパの貴族制や王制、アジアの王制などと比較しながら、民主主義国たるアメリカには、それまでにない性格を有した個人が必要であり、それは「プライドを持ち、自立した」ものでなければならないと、ホイットマンは宣言している。

このように、当時のアメリカの精神的な意味での自立と、アメリカ人として旧来の文化から別れ、自らの文化を創出しなければならないという意味での自立が重なり合い、その新しい文化にふさわしい人間を生みだすことが重要だとされていたのである。そして、その新しい文化を担う新しい人間の性格の要素に「プライド」があるのだとホイットマンは主張している。

しかし、こうした「自立」はもちろん旧世界の文化とは異なる、新たなアメリカの文化を築くにあたり必須の要素ではあったけれども、「プライド」だけを先行させてしまったのでは、人としての心理的なバランスは悪いものにならざるを得ないだろう。実際、ホイットマンの批判としてよく知られているものに、彼の主唱する人物像はただの自己中心主義者であり、詩人が構築する世界観はナルシスト的なものにすぎないのではないかという批評がある。たとえば、ブラック（Stephen A. Black）はこの点について、次のように述べている。

ホイットマンは、外界の対象とふつうの「大人な」関係を通して自分の必要を満足させるという能力を明らかに欠いており、そのため、耐えがたい不安にさらされ、ナルシスト的な空想世界を構築することで安心を見出しているのだ。［Black 138］

ブラックの批評はフロイト（Sigmund Freud）の理論にいささか寄りすぎているため、極端に精神分析的な批評になってはいるが、それでもこうした批判が繰り返されるのは、やはり詩人の創り出す人物像にどこか自分本位で勝手なイメージが感じ取れるからだろう。

そのことはホイットマン本人にも分かっていたはずで、「プライド」だけを中心に人間を描いてしまえば、結局、ナルシズムを広めるだけに終わってしまうと感じていたはずである。そのため、先の引用にもあったように、ホイットマン自身「均衡をとる」ために、もう一つ

の要素である「シンパシー」を導入する必要があったのだと考えられるだろう。

では、そのホイットマンの主張する「シンパシー」とは、いったいどのようなものだったのであろうか。前節でアダム・スミスの「シンパシー」を検証したときに確認したことだが、自己と他者を完全に分離して考える個人主義的な文脈では、自己は他者の内部に直接入ることはできないため、理論上、他人の感情を直接理解することはできないことになる。そこで、この自己と他者のあいだに広がった大きな溝を埋めるために、想像力を使役せざるをえなくなる。想像力を用いれば、相手がどのような感情にあるのか、相手がどのように思っているのかを取り込むことが可能になるからである。そして、こうした能力こそ、人間に特有のものだとホイットマンは主張する。たとえば、「喜びの歌（“A Song of Joys”）には、次のような歌詞が登場する。

O the joy of that vast elemental sympathy which only the human soul is capable of generating and emitting in steady and limitless floods

（訳：広大で基本的なシンパシーの喜びよ、それは人間の魂にだけ生み出すことができ、着実に無限の勢力となって放出されるのだ）

［*Leaves of Grass* 177］

あるいは、次の詩行では、「シンパシーのない」者は「経帷子を着て自分の葬儀」に出るようなものだと歌われている。

And whoever walks a furlong without sympathy walks to his own funeral drest in his shroud,［*Leaves of Grass* 86］

（訳：シンパシー失くして歩む者は、経帷子を着て自らの葬儀に歩む者）

シンパシーがないということは、すでに死者同然であるという含意がこの中に見て取れるだろう。

さらに、彼は「私自身の歌」においても「われこそは、シンパシーを証言する者（I am he attesting sympathy）」［*Leaves of Grass* 50］と記すだけでなく、そのノートの中では「シンパシー」こそ「法則の中の法則（the law over all laws）」であるとも書いている（Holloway 811）。こうした考え方は、アメリカ社会で広く唱えられていた説で、たとえば1769年にジョン・スチュワート（John Stewart）は「シンパシー」こそ、モラルの世界において「最高峰の法則（the paramount law of the moral world）」（Browne 25）であると記していた。

つまり、「シンパシー」とは単なる感情の問題というよりも、人間に特有の、そして、なくてはならない必須の法則であるという考えが、ホイットマンの中にも根付いていたといえよう。この考え方は、主著である『草の葉』以前の作品－たとえば、『フランクリン・エバンズ』－においても現れており、同作品において「弱い者とどうにもならず苦しんでいる者へのシンパシーは、われわれの観念の中でおそらく増加してきているのだ」（*EPF* 198）という文言をみることができる。そして、相手の立場へ想像力を用いて同化することは、アダム・スミスとは異なり、精神的・宗教的・神秘的側面を大きく伴っているのが、ホイットマンの特徴でもある。こうした同化は、自己とは明らかに異なる他者の経験をも自己の内部に採り込み、自他の枠組みを想像力を使って超越する体験を促す。たとえば、「私自身の歌」には、以下のような有名な詩行が登場する。

All this I swallow, it tastes good, I like it well, it becomes mine,

I am the man, I suffer'd, I was there.［*Laves of Grass* 66］

（訳：私はこれらすべてを飲み込んだ、気に入った、それは私となる、私がその男であり、私が苦しんだのだ、私がそこにいたのだ）

ここでは、自分が実際にはいない場所に「いた」ことになり、本来他者が味わっているはずの苦しみを「私が苦しんだ」ことになっている。キリングズワース（M. Jimmie Killingsworth）は、こうした詩人の特徴的な自他の「融合」を「道徳的、心理的、そして政治的な境界を自己が超越する傾向」（Killingsworth 1）と説明している。

想像力をはばたかせることによって、本来あるはずの自己と他者の境界を曖昧にし、それどころか、他者の経験を直接的に自己の経験へと変換してしまうのが、ホイットマンの主張する「シンパシー」の特徴ということになるだろう。これは、当然のことながら、アダム・スミスの「シンパシー」よりも、遥かに神秘的・宗教的・精神的な体験であり、きわめて文学的な表現というほかないだろう。

このように、ホイットマンにおいては、自己を他者と区別し、そこから独立し、一つの個我として存在するという「プライド」という側面と、他者と自己の境界を曖昧にし、他者の体験そのものへと（想像力を行使して）入り込んでいく「シンパシー」の二つの側面がある。そして、この二つの側面においてうまく均衡をとらなけれ

ばならないというのが、彼の基盤となる主張であった。

Ⅳ

「シンパシー」という概念は、元来、アダム・スミスにおいて、道徳的・政治的概念として提唱されたものであり、そもそも経済的な社会の変革をとらえて登場した概念である。しかしながら、スミス自身がそこに文学を体験する読者の存在との比喩を描いていたように、もともと文学的体験と似た心理過程が含意されていたのも事実だろう。

その概念がアメリカで大きく展開したのが、19 世紀中葉であったというのも偶然ではあるまい。19 世紀は、アメリカ社会がようやくヨーロッパ（とりわけ、イギリス）の影響から抜け出し、独自の文化を構築しようとした時期であり、それは、また社会全体が市場化し、次第に資本主義の波に飲まれていく時期でもあった。こうした時代を背景に、旧世界とは異なる新しいアメリカ的人物像が求められると同時に、それは、富や金だけを希求する人物であってはならず、徳に秀でた存在でなければならないという社会的な要請があったのだろう。

ホイットマンはそうした時代を背に登場した詩人であり、19 世紀に巻き起こったアメリカ的な要請にいち早く反応したのだといってもいいだろう。その際に、彼が考えた理想的な個人には、「プライド」という側面と「シンパシー」という側面の二つが必要とされ、その両極において均衡をとれる人間を理想として描いたのだろうと思われる。

ホイットマンにおける「シンパシー」は、アダム・スミスの「シンパシー」とは違って、きわめて心理的であり、神秘的であり、かつ、宗教的でもある。スミスがそこから「中立の傍観者」という概念を発展させたのに対して、ホイットマンはそこから他者への没入（merge）や同一化（identification）[5]というまったく別の道を歩むことになる。そこには、思想家としてのスミスと、作家としてのホイットマンの違いが明瞭に現れているのだろう。

しかしながら、スコットランド啓蒙思想が生み出した「シンパシー」という概念が 19 世紀のアメリカを席巻し、ホイットマンにも大きな影響を与えていたことは間違いないだろう。彼はこの「シンパシー」という概念を自分の思想の中心にすえることで、次々に新しいテーマと様式の詩を生み出したのであり、それはまた、ヨーロッパと異なる文学様式を求めていた当時のアメリカ社会の要請に応えたものであったのである。とりわけ、この「シンパシー」への関心は、初期の詩に多くみられる「同一化の詩群」に典型的に表されているといっても過言ではあるまい。

もっとも、こうした神秘的な他者への「シンパシー」に基づく同一化には、やはり現実的でない部分がある。いくら「シンパシー」によって他人の体験を味わうことができると主張したところで、他人の体験そのものを直接経験できるわけではない。そこには、物理的で、不可避的な境界が厳然と存在しているのも事実である。そのため、ホイットマンの同一化を描いた詩群は、南北戦争前までに主として書かれることになったのだろう。彼がこうした詩を主に表現したのは、『草の葉』の第 3 版（1860 年出版）までであったからである。その後に、アメリカ国民が経験することになる南北戦争（1861～1865 年）は壮絶をきわめた戦争で、この戦争に看護人として参加したホイットマンは厳しい現実をそこで思い知ったのだろう。したがって、南北戦争以降の彼の詩に、こうした「シンパシー」を基軸とする詩はあまり見受けられないことになる[6]。

いずれにせよ、スコットランド啓蒙思想が考案したモラルある市民という考え方が、「シンパシー」という概念を生み出し、その概念がアメリカの 19 世紀の思想家たちにも多大な影響を与えたのである。そうした影響を受けたホイットマンは、もともと哲学的な概念であった「シンパシー」を、独自なかたちで神秘的に再解釈し、詩的世界を構築すると同時に、新しいアメリカという社会に必要な人間の資質についての基盤であると考えたのだろう。

注

1）「シンパシー」概念とアメリカ全般の関係については Crain をみよ。また、アダム・スミスとの関係は、同著　2-4, 14-15 などをみられたい。

2）sympathy という単語をどう訳すかについては、まだ定訳がない。一般には「共感」と訳されるが、そこに情緒的な含意があるのを嫌って「同感」と訳す学者もいる［田中 2003 を参照されたい］。そこで、本稿では「シンパシー」とカタカナ表記を用いることにした。

3）スミスはすべての場合において想像力を行使すると述べているわけではない。自然発生的なシンパシーについても論を展開している［ラフィル 14］。

4）観察者の視点を自己の内部に引き込むことによって、ある種の道徳を獲得するという興味深い過程は、残念ながら、本稿の検証対象ではない。この点に関しては、田中 2009 の 25-30 ページをみられたい。

5）ホイットマンにおいては、自己と他者は峻別されはするものの、それは永遠に離反したものではなく、むしろ自己によって吸収（absorb）されていくものだと考えられている。こうした自己と他者（物を含む）との「一致」を「同一化（identification）」「適合（tally）」「一致（fit）」などと呼んでいる。このように対象と自己が一致して動いていく

過程が、ホイットマンの初期の詩の特色の一つとなっている。

6）この「シンパシー」という概念が、南北戦争後にどのように変容するかについては、また別の論考で考察してみたい。

参考文献

アダム・スミス著　村井章子・北川和子訳『道徳感情論』日経 BP 2019.

Bennet, Jane. *Influx and Efflux : Writing Up with Walt Whitman.* Duke UP. 2020.

Browne Ray B., ed. *Themes and Directions in American Literature.* Purdue University Studies. 1969.

Burke, Edmund. *Walt Whitman, Man and Poet,* Cosmopolis, June, 1889.

Cohen, Matt, ed. *The New Walt Whitman Studies.* Cambridge UP. 2019.

Crain, Caleb. *American Sympathy : Men, Friendship, and Literature in the New Nation.* Yale UP. 2001.

Holloway, Emory ed. *The Uncollected Poetry and Prose of Walt Whitman.* Double day, Page & Co., 1921.

Kaplan, Justin. *Walt Whitman : A Life.* Harper Perennial Modern Classics. 2003.

Killingsworth, M. Jimmie. *Walt Whitman As Man, Poet and Legend.* Southern Illinois UP. 1961.

King, Mike. *Negotiating the Hierophant : Walt Whitman and Other Gurus.* Stochastic Press. 2018.

モロウ，G. R. 著　鈴木信雄・市岡義章訳『アダム・スミスにおける倫理と経済』未来社　1992.

ラフィル，D. D. 著　生越利昭・松本哲人訳『アダム・スミスの道徳哲学－公平な観察者』昭和堂　2011.

Reynolds, David S. *A Historical Guide to Walt Whitman.* Oxford UP, 2000.

拓殖尚則『イギリスのモラリストたち』研究社　2009.

田中正司『アダム・スミスと現代－市場経済の本来の在り方を学ぶ』御茶の水書房　2009.

田中正司『アダム・スミスの自然法学－スコットランド啓蒙と経済学の生誕』御茶の水書房　2003.

Whitman, Walt. Emory Holloway ed. *The Uncollected Poetry and Prose of Walt Whitman.* Doubleday, Page & Company. 1921.（*UPP*）

Whitman, Walt. *Leaves of Grass.* A Norton Critical Edition. 1973.

Whitman, Walt. Thomas L. Brasher ed. *The Early Poems and the Fiction.* New York University Press. 1963.（*EPF*）

Zweig, Paul. *Walt Whitman : The Making of the Poet.* Basic Books, Inc., Publishers. 1984.